

ひかりのこ

4月園便り

聖ミカエル幼稚園
2014年4月9日

『おおきなあれ。ミカエルっこ』

皆様、ご入園、ご進級おめでとうございます。今日から聖ミカエル幼稚園の2014年度の活動が始まります。今年度も皆様のご協力のもとに、ワクワクするような楽しい充実した保育が行えるよう、私たち教員一同日々努力してまいりますのでどうぞよろしくお願い申し上げます。

さて、2月10日発行の『日本教育新聞』に興味深い記事が載っていました。お茶の水女子大名誉教授らが進めている「遊びと学び」プロジェクトの調査で、司法試験や難関大学入試の合格など、「難関突破」を経験している人の多くが、就学前の幼児期に「遊び」を重視した育児を受けていたことが分かった、という記事です。特に、保護者が子供に対して「とても意識的に取り組んでいたこと」は、『思い切り遊ばせること』『子どもの趣味や好きなことに集中して取り組ませること』だったそうです。また、保護者の子育て傾向は「共有型」、つまり子どもに共感し、子どもに考えさせ、その自主性を受け止めるタイプが圧倒的に多かったということです。難関大学はさておき、この記事は子育てに大きなヒントを与えてくれます。

そういえば、去年私の畑でこんな失敗がありました。畑の作物に良いと思い、たくさん堆肥を入れ、農家から安く買ったもみからも前年の秋にすき込んで、準備万端ジャガイモを植えたのですが、秋に収穫してみると、虫に食べられた跡がたくさん見つかり、大失敗でした。もったいないので虫の食べた跡を取り除いて、我が家で調理して食べました。虫が好むぐらいいですから味はばっちりでしたが、「これではよそ様におすそ分けもできない・・・」ということになってしまいました。あとで農業の専門家にお聞きしたところ、「それは堆肥のやりすぎだよ。次は堆肥を少し押さえてごらん。」とおっしゃっていました。堆肥のやりすぎが虫を呼んだ、ということなのです。子育てと野菜栽培を一緒に考えるのはちょっと乱暴ですが、子どもも野菜も成長に合った育て方がとても大切なのだ、何でもたくさん与えればいい、という訳ではなく自らが育とうとする意欲をサポートすることが大切なのだ、ということが言えると思います。

聖ミカエル幼稚園は、保育の中でたくさん「遊び」を取り入れています。園庭でたっぷり遊んで、虫や植物を発見したら玄関に置いてある図鑑で名前を調べて、お部屋に帰ってきたら先生から絵本を読んでもらっています。幼児期にはこれで十分。毎日のびのび生活することが子どもの成長には一番なのです。雪がすっかり解けたら、また、お外でたっぷり遊べる季節がやってきます。柔らかな風の中、子ども達の歓声が園庭に響くワクワクする季節の到来です。

園長 渡部良子

月主題：安心して

- 保育者や友達に親しみをもつ。
- 好きな遊びを見つけ安心して過ごす。
- 祈りを通して神様と出会う。

キリスト教保育

北海道から東京に移住した知人から、北海道の真冬の雪は大変だけれど、春はとても良かったという感想を聞いたことがあります。なぜかという、冬の重く厚い雪の下でも春近くなると新しい命が胎動していて、時が来れば雪を割って出る草花の新しい命の躍動が目に見えるからです。私たち北海道に住む者には当たり前前の風景でも、違う人が見ればすばらしく感動的なことなのです。

春は、再生や回復の季節と言われます。幼稚園もまた、新たな一員となる新入園のお友だち、進級するお友だちがそれぞれ新しい命の輝きをもって集まります。幼稚園そのものが、まるで一つの生命体のように生まれ変わって1年の新たな歩みを始めようとしています。子どもたち一人ひとりの確実な成長とともに、幼稚園もまた成長していくことが楽しみでもあります。

そしてこの季節、教会は復活日＝イースターを祝います。これは教会の移動祝祭日で、その年によって日にちが違います。クリスマスよりももっと大きな喜びをもって迎えます。今年は4月20日がこの日に当たります。十字架につけられたキリストが3日目に死から生へ甦ったこと、そのことによって私たち人間もまた、常に新しくされ続けるという約束が与えられています。毎日の連続の中で生きていくように見えながら、実は、私たちは昨日までの自分とは違う自分を今日、生きているのです。一日一日が、独立したすばらしい意味を持ったものとして与えられている不思議さ。その神秘を最も感じさせてくれるのが春であり、復活の出来事です。

さて、この時期チャプレンが交代したことも幼稚園にとって新しいことの一つです。子どもたちと色々なことを分かち合い、驚き合い、発見し合えることを楽しみにしています。どうぞよろしくお願い申し上げます。

チャプレン 司祭 下澤 昌